



まちのにほんごプラットフォーム

●●外国につながる子ども・親子を支える現場から●●

実施報告

「まちのにほんごプラットフォーム」とは？

「日本語学習」や、生活の中での日本人・外国人の「コミュニケーション」に関わる様々な取組を紹介し、皆さんで意見交換・情報交換を行います。集った人たちの課題や視点の共有・ネットワーク作りの場です。

外国出身の人たちの増加・定住化が進み、学校や職場、生活の場など、日常の暮らしで多文化を背景にした様々なコミュニケーションが行われています。そして、外国人のなかには活躍する人がいる一方で、言葉や文化の壁などで支援を必要とする人もいます。

「まちのにほんごプラットフォーム」は、多様な人々が活躍できる地域づくりにむけ、日本人、外国人、活動分野の異なる方々が行き交い、さらなる行動のきっかけを得られることを目指しています。



2017年4月

●はじめに

外国人住民の増加につれ、外国籍・外国につながる子どもの数も増えています。横浜市内の公立小中学校に在籍する外国籍・外国につながる児童生徒の数は 8,423 人、つながる国は 99 か国地域に及びます。そのうち、1,670 人の児童生徒が日本語指導を必要としており、学校や地域で日本語や教科学習も含めたサポートが急務となっています。<*注1> また、就学前の子どもの子育て支援においても、外国人保護者の子育ての困難や孤立、支援者とのコミュニケーションの難しさ等が課題として顕在化してきました。<*注2>

そのような背景から、この事業では 2016 年度、子ども支援・子育て支援に焦点を当て、テーマを「外国につながる子ども・親子を支える」としました。特徴的な取組を行う 4 つの団体から現場の事例を発表いただき、さらに、個別テーマごとのディスカッションの機会を設けました。当日は子育て支援関係者、学習支援の関係者、行政、学校関係者など多くの方々にご参加くださり、それぞれの活動における課題やアイデアの共有、ネットワーク作りにつなげることができました。本報告により、当日の様子や発表団体の取り組みが多くの人に共有され、皆様方に気づきや得るものがあるものでしたら、これに勝る喜びはありません。

今後も、外国人・日本人のコミュニケーションが進み、多様な人々が活躍できる地域づくりにむけ、多くの方々と連携していきたいと思えます。

最後になりましたが、事例をご発表いただいた団体の皆様、ファシリテーターを務めてくださった坂内泰子様、また、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

2017 年 4 月

公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE)

<*注1> 統計はいずれも 2016 年 5 月 1 日現在。横浜市教育委員会調べ。

<*注2> 「横浜で生活する就学前の外国人親子のための日本語支援・子育て支援調査報告書」(2015 年 3 月) を参照。

http://www.yoke.or.jp/8nihongo/8nihongo_gakushu_shien.html



●開催概要

まちのにほんごプラットフォーム

— 外国につながる子ども・親子を支える現場から —

- 日 時：2017年1月29日（日）13：00～16：30
- 場 所：アートフォーラムあざみ野 2階 セミナールーム
- 参加者：60人
- ファシリテーター：坂内泰子氏（神奈川県立国際言語文化アカデミア）

■内 容：【第1部】ポスター・パワーポイントによるブース発表

- ・発表団体 多文化共生スポット・ワールドキッズ（磯子区・学習支援）
KANJIクラブ（都筑区・学習支援）
カニタの会（金沢区・保育付き日本語教室）
瀬谷区・地域子育て支援拠点にこてらす

【第2部】テーマ別グループディスカッション

- 「連携・ネットワークを広げるには？」
- 「外国人親子とつながるには？」
- 「外国人当事者と共に取り組むには？」
- 「仲間を増やすには？」

- 報 道：2017年1月30日毎日新聞（神奈川版）
- 主 催：公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）
- 協 力：男女共同参画センター横浜北（アートフォーラムあざみ野）



多文化共生スポット ワールドキッズ

磯子区 2016～ 代表 王広子さん

- 外国につながる小中学生の日本語/学習支援教室
- 場所：根岸コミュニティハウス
- 日時：土曜日 15：30～17：30

設立1年、地域や大学のボランティアセンターなどにかかけあいサポート体制を構築中。
子どもたちの居場所として、その子に合った勉強法を一緒に見つけていきたい。

- ・公立小学校での「初期適応支援」や「学習支援」<*注3>に関わる中で、さまざまな課題に気づいた。外国につながる子どもは3年前の3倍。50音も分からずに普通教室へ通っている現実。地域にサポート体制がなく、やむにやまれず自宅で活動開始。
- ・区役所、NPOに相談しつつ、近隣のイベントや講座を回って広報。大学のボランティアセンターにも掛け合った。学習支援教室に通っていた卒業生も仲間になった。
- ・現在はコミュニティハウスで活動中。教材を自転車に積んで毎回運んでいる。
- ・保護者とも話すように心がけている。三者面談に同行することもある。
- ・子どもたちのつながる国は全員が中国。
学校の勉強を中心に学習支援や日本語の練習をしている他、学校生活のことも話し合う。
学校が違う子ども達が集まり、母語でおしゃべりするなど、ホッとできる居場所にもなっている。

保護者や学校長をはじめ地域に理解者を増やすこと、
ボランティアを確保すること、広く仲間を増やして活動の土台を築きたい。



- <*注3> ●初期適応・学習支援・・・教育委員会により、日本語指導が必要な児童生徒へ、母語のできるボランティアによる初期適応・学習支援が行われています。国際教室<*注4>が設置されていない学校に在籍する対象児童生徒1人につき20回、国際学級設置校に在籍する対象児童生徒1人につき10回を学校に配当されます。
- <*注4> ●国際教室・・・日本語指導が必要な外国籍児童生徒の数が5人以上の学校に、担当教員が加配されています。

—「ようこそ横浜の学校へ I 日本語指導が必要な児童生徒受入れの手引き」
平成28年10月改訂版 横浜市教育委員会

KANJI クラブ 都筑区 2016～

つづきMYプラザ 副館長 足立 亜矢子さん

- 外国につながる小中学生の日本語/学習支援教室
- 場所：つづき MY プラザ（MY=Multi+Youth）
- 日時：土曜日 13：30～15：30

学校・家庭・支援者の「支援のトライアングル」。
親も子も安心して暮らせる地域社会に向けて、
必要なコーディネーションをしていきたい

- ・ 2003年、ブラジル出身の子どもの初期支援をきっかけに、ボランティアグループが立ち上がった。外国人が苦手な「KANJI」がグループ名に付けられた。2015年からは、つづきMYプラザが主催。
- ・ 「支援のトライアングル」…公共施設という立場から、家庭（親）や学校とも繋がり、三者で話す場を設けている。親が支えられていると感じると子どもも変わっていく。学習支援を効果的にする為にも家族の支援が必要。
- ・ できるだけ学習時間が確保できるよう、近隣の教室にも繋いでいる。
- ・ ボランティアは大学生からシニアまで様々。
- ・ 小中学生の背景も多様。日本に来たばかりの子どもや、日本生まれで家庭内言語が日本語以外の子どもたち、出身も色々（約9カ国地域）で、都筑区だけでなく、緑区、青葉区、港北区、隣接する川崎市宮前区からも来ている。年齢や背景、学校が違う子どもたちが集まり、ホッとできる場所にもなっている。
- ・ 引き継ぎノート、教室に来てまず取り組めるプリントが用意されているなど、担当が変わってもスムーズに支援できる工夫も。
- ・ サマーコースや自由研究、学習発表会（おとなの日本語教室と合同）もある。学習発表会では、歌や朗読などを発表し、自信を付けていく。この自信が次の学習につながっている。



日本生まれの子どもたちが小学生時代に置き去りにされている。

「生活言語」はできるが「学習言語」が難しいと感じる。<＊注5>

親が地域（PTA など）に関わるにはどうしたらよいか。日本社会から分かれている印象。

<＊注5> ●生活言語・学習言語・・・言葉には二つの役割があります。1つは「コミュニケーション」としての役割で、もう1つは「思考」の手段としての役割です。それぞれを「生活言語能力」と「学習言語能力」と呼びます。生活言語は1～2年で身に付くのにに対し、学習言語の習得には5～7年かかると言われています。日常生活に不自由がなくなっても、教科書の内容が理解できるようになるまでには、さらに支援が必要です。特に国語や社会の歴史などは、抽象性が高く、生活経験や文化的な背景も異なるため、外国籍等児童生徒にとって最も困難な教科です。学習支援は日本語初期指導から教科指導へと移行しますが、子どもの得意不得意や成育歴、学習歴などによって、個に応じた支援が求められます。

—「ようこそ横浜の学校へ I 日本語指導が必要な児童生徒受入れの手引き」

平成 28 年 10 月改訂版 横浜市教育委員会

カニタの会 金沢区 2010~

代表 田島 敏子さん

- 幼稚園に入る前の子どものいる外国人ママの日本語教室（保育つき）
- 場所：金沢区の民間貸会場
- 日時：第 2.3 水曜日 10：30～12：30

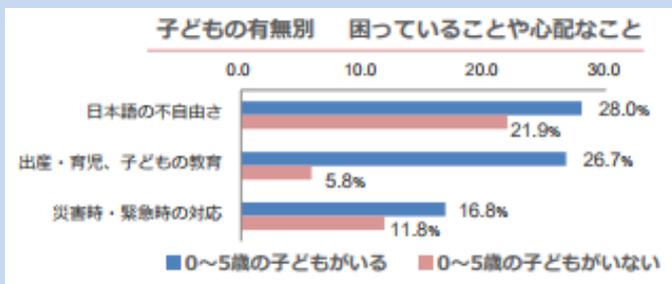
出産・子育てで日本語学習から離れてしまう保護者のために活動を開始。
「継続は力なり」をモットーに、出来る範囲で場を開いていきたい。

- ・ 出産や子育てで日本語学習からはなれてしまう学習者が多いことを知る。周りで受け入れる教室が地域になかったため、「いま必要。待たなし！」と有志で立ち上げた。
- ・ 場所があったから「保育付き日本語教室」をとりあえず始めることができた。（夫の会社のビルの一室を借りる）
- ・ 出来ることを出来る範囲で。完璧を目指さない。
- ・ 幼稚園入園後は国際交流ラウンジの教室を紹介。
- ・ 電車に乗って通うのは一つのネック。徒歩圏内のママ達が口コミで切れ目なく親子でやってくる。（国際交流ラウンジからの紹介もある）
- ・ 子どもが入園するまでの短い期間だが、若い母親の日本語学習は大事。区でも考えてもらえたらうれしい。
- ・ 日本人の夫は忙しく話し相手がないお母さんの、ストレス解消の場にもなっている。
- ・ 生活情報も提供。地域子育て支援拠点の「外国人ママの会」の活動紹介も。
- ・ 保育スタッフの確保がむずかしい。保育の勉強をした娘が子連れで応援に来ることも。
- ・ 保育や日本語のボランティアさんが急に休んでも、代わりの人がすぐ見つかるような体制にしたい。

私は今村カニタです。タイから来ました。日本に来て7年になりました。最初は、金沢区のラウンジで日本語を勉強しました。それから、子供が生まれましたので、ラウンジへ行けなくなりました。その時、田島先生から「子供とお母さんと一緒に、日本語を勉強しませんか」と声をかけられました。その後、約2年間、日本語を勉強しました。大変助かりました。

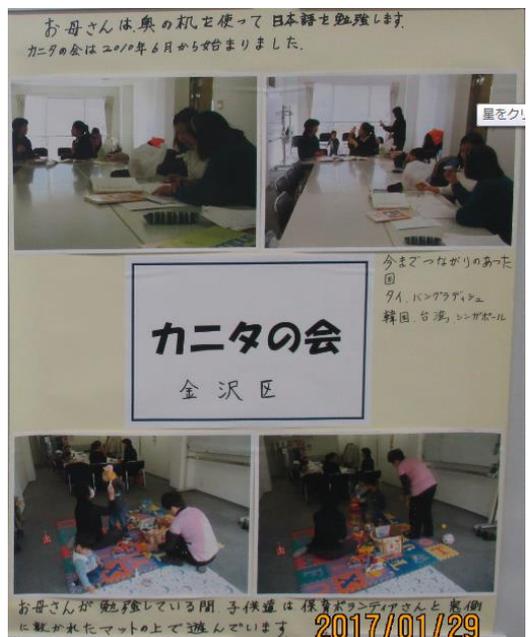


会の名称にもなった“カニタさん”からのビデオメッセージより



平成 25 年度横浜市外国人意識調査によると、「困っていることや心配なこと」について、0-5 歳の子がいる世帯では、いない世帯に比べて、「日本語の不自由さ」「出産・育児・子どもの教育」「災害時、緊急時の対応」を上げる割合がとくに高くなっています。乳幼児を育てる外国人がこれらの項目に対してより不安を抱いていることから、この時期にこそ日本語学習支援や子育て、生活に必要な情報支援が重要であるといえます。

横浜で生活する就学前の外国人親子のための日本語学習支援・子育て支援調査報告書
- 「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査」から - 2015年3月 (YOKE)



瀬谷区地域子育て支援拠点 にこてらす 2011年～

利用者支援員 金子美津子さん スタッフ 林 静さん・稲田あきさん



地域の子育て支援につながるまでのハードルを下げたい。
頼もしい外国出身スタッフの力と共に、まずはできることから！



日本語教室の学習者でもある稲田さん（ベトナム出身）
“にこてらす”利用者だった林さん（中国出身）
ともに「にこてらす」スタッフとして活躍。

- 「地域子育て支援拠点」とは…
未就学の子どもとその保護者、妊娠中の方とパートナーのための、公共の子育て支援施設。親子で遊んだり、仲間を作ったり、いろんな相談ができる所。各区に設置<*注6>
- 子育てのことだけでなく、夫婦の問題、人間関係、病気・病院のこと、「生活に困った」など、ひろく相談を受けている。（相談は子どもが18歳まで可。）
- “にこてらす”開館時間 火～土 9:30～15:30
利用無料。URL：<http://www.nico-t.jp/>

- ・瀬谷区の外国人人口上位3カ国：中国/ベトナム/フィリピン。国際交流ラウンジがなく、国際教室は3校。
- ・外国にルーツを持つ子育て家庭では、日本人なら何とか乗り越えられる問題でも、長期化したり複雑化する場面も多い。
- ・瀬谷区のボランティア日本語教室と連携し、保育付きの日本語学習の場も提供。日本語の学習から“にこてらす”への利用という流れができた。
- ・小さいうちから繋がりをつくっていくことで学齢期の問題を減らすことができる。
- ・外国人スタッフが間に入ることで、にこてらす利用のハードルが下がり、他の外国人の問題も把握できるようになった。
- ・外国人ママの会<ランチ会>も盛況。
- ・「おやこにほんごタイム」（親子と一緒に学ぶ・遊ぶ、情報を得る）を試行。<*注7>
- ・小学校とも連携。外国人スタッフが「あゆみ」の説明を通訳するなど、地域密着の通訳翻訳チーム「カムオンシェシェ」もスタート。*「カムオンシェシェ」→ベトナム語、中国語で「ありがとう」の意

<*注6> 地域子育て支援拠点

参考情報：「でかけてみよう！親子の居場所&子どもの一時預かり情報」横浜市こども青少年局
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/shien/oyakonoibasyo.html>

<*注7> おやこにほんごタイム

にこてらすと(公財)横浜市国際交流協会の協働事業(2015年度)。
就学前の親子が集う場に、日本語学習・情報提供をプラスした活動です。
教材等をまとめた「おやこにほんごタイム活動ネタ集」も公開しています。
http://www.yoke.or.jp/8nihongo/8nihongo_gakushu_shien.html





●●● 第2部 テーマ別グループディスカッション

4団体の発表をうけ、発表内容に関わる4つのテーマに沿ってディスカッションを行いました。其々の活動における課題やアイデアの共有、ネットワーク作りにつなげることができました。

●「外国人親子とつながるには？」

- ・外国人・日本人親子の語り合いの場、保育付日本語教室、学習支援教室など、場はあるが、情報が必要な人に伝わっていないのでは？
- ・最初の入口、区役所でのサポートが重要。
- ・母子手帳をもらう時、乳幼児健診を受ける時などに、関係を築きながら情報提供できるといい。
- ・地域の民生委員、保育園の園長など、行政の人材をこの活動に取り込んでいけるといい。
- ・外国人親子とつながるには、当事者同士の口コミやSNSが効果的。
- ・親子と一緒に学ぶことができる場があると良い。(日本語、動揺、絵本読み、歌など) その場を通じて親のネットワークが広がるのが大切。

●「仲間を増やすには？」

- ・スマホを使って若い人にアプローチ。
- ・言葉のできる子どもの親や、その友達にも関わってもらう。
- ・子どもと同じ出身国の方が接することも、コミュニケーション上、大切。
- ・各グループの横のつながりができたら良い。
- ・継続的に関わってもらうために、初日の対応を工夫する。(少し早く来てもらったり、残ってもらい、説明時間を確保するなど)

●テーマ：「仲間を増やすには？」

「悩み」と「解決策」とに分けて話しあいました。

「悩み」は3つ。①どのネットワークを使ったらボランティアが増えるか。②大学生ボランティアは定着しない ③ボランティアのクオリティです。

「解決策」としては、スマホを使って若い人に呼び掛けるのもいいですね。ボランティアは日本人と決めないで、言葉のできる親、子どもの親の友達も募集というアイデアが出ました。

クオリティはなかなか難しいです。経験あるボランティアが新しいボランティアに教えるといった意見がでました。

中学生のとき学習支援教室で学び、現在は支援する側になった王さん





●「外国人当事者と共に取り組むには？」

- ・情報は当事者に伝わりにくい。
地域プラットフォーム（たまり場）が必要。
- ・参加しやすい場があること。当事者の思いを受けとめて共に考え行動すること。
- ・当事者が他の当事者につながり、回りの当事者にと、人と人をつなぐ役目にもなっている。
- ・外国人当事者だけ、日本人（支援者）だけ、それぞれ単独ではできないことも、両者がそろって可能になることがある。
- ・外国につながる子ども、およびその親への支援はそれぞれが抱えている問題が多様であり、そのためには支援する組織のスタッフのコーディネーション能力が特に大切であると考えます。そうしたスタッフの育成、増員が必要と考えます。
- ・ボランティアの先細り、今まで持ち出しボランティアが多過ぎた。公的機関のサポートシステムの整備を。

●「連携・ネットワークを広げるには？」

- ・こんなに“思い”を持っている人、団体がある！
お互いのことを知ってもっと“つながり”を！
- ・今日繋がった顔のみえる関係を大事にしたい。
- ・区によって、状況がかなり違うようなので、小さな単位で働きかけができればいい。
- ・学校との連携をどうとるのか難しい。
- ・各学校やボランティアグループとつながるためにも 教育委員会への働きかけも重要であると感じた。
- ・幼稚園・保育園～小～中～高 すべてにつながるコーディネーターがほしい。
- ・外部との風通しを互いによくしていく意識を高めていきたい。
- ・教室で学習している外国の方をスタッフに巻き込む、という展開に新鮮な驚きがあった。そこから学校の先生もママもつながれたらいい。



●テーマ：「外国人当事者と取り組むには？」

支援を受けていた人達が支援者になる、外国人の力を取り込んでいく、そのためには居場所感の創出とその人を活かせるネットワークが大事です。支援する側に立ちたいと思った時に、その気持ちを汲み取って、逃がさず繋げていくことが大切だと思います。

港北区地域子育て支援拠点スタッフ 金さん

● ファシリテーター・まとめ

やさしさと行動力をもって、親子へのアプローチを

神奈川県立国際言語文化アカデミア 坂内 泰子さん

設立から1年という短期間ながら、精力的に頑張っ課題に取り組み、地域や大学などへの働きかけを続ける「ワールドキッズ」さん。ラウンジに通えない数年というニッチなすき間を押さえて支援を続ける「カニタの会」さん。団体の公的性格を利用した「支援のトライアングル」で学校・家庭・支援者の三者を結ぶ「KANJI クラブ」さん。外国籍の方の力をうまく取り込んで、支援する際のハードル（言語や文化）を下げ、外国につながる親子への支援の質を上げ、日本語教室とのコラボまで実現した「にこてらす」さん。4団体それぞれ特長があり、素晴らしい発表と忌憚のない意見が行きかうディスカッションでした。

外国から日本に移住してくる人々は、空間移動するだけでなく、日本社会での時間軸に乗り換えて、人生を送ることになります。国で培ってきたものをいったんリセットして、これからの長い年月に備えなくてはなりません。異文化の中で、葛藤と闘いながらそれぞれのライフステージを生きる外国につながる人々、中でも子育て期にある人々には、いろいろな方面からの手助けが必要です。子どもを誰かに預けて親だけが日本語教室で勉強する形—それも必要な支援ですが、その形だけではないのです。今日の参加団体からわかるように、親子へのアプローチはいろんな形で可能です。どの団体にも強みがあると同時に制約や限界もありました。できることをする、できないことはまた別の団体や個人に任せればよいと思うのです。

その上で、いま、自分は何ができるか、何に関われるか、親側からでも子ども側からでもいい、優しさと行動力で、一人ひとりが無理のない支援に関わり、その先につないでいきたいですね。



●参加者アンケートより

- ・他の団体の方はどんな課題を持ってどう解決しているのか知りたくて参加したが、聞いているうちに、自分の会の問題や課題が何かを自覚しなければいけないのだと気付かされた。
- ・短い時間を端的に効果的に発表なさっていて、気軽に質問できる時間もあって、時間内にすべての団体も回れたのが良かった。
- ・もっと時間が欲しかった。そのくらい話の内容が濃くて勉強になった。
- ・活動はちがっても思いはひとつ。
- ・外国人の親子が地域の中で同国人（コミュニティ）・日本人・地域コミュニティとネットワークをひろげていくことのヒントを幾つも頂いた。
- ・学校、公共機関、民間ボランティア団体、外国の方、すべてをつないでくれるコーディネーターが欲しい。
- ・大勢の方が外国人支援活動をされていることを知り、またがんばろうと思った。
- ・各区で同様の取組みができるといい。
- ・本日の各意見をぜひ横浜市各行政に知らせて欲しい。
- ・行政や学校とつながるための具体案があったら知りたい。



まちのにほんごプラットフォーム
～外国につながる子ども・親子を支える現場から～ 実施報告書

発行日 2017（平成 29）年 4 月
編集・発行 公益財団法人 横浜市国際交流協会
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 1-1-1 パシフィコ横浜横浜国際協力センター5F
電話 045-222-1173（多文化共生推進課） <http://www.yoke.or.jp/>